論　文

大東亜学術協会の設立と活動

久保田裕次†

はじめに

本稿の目的は、アジア・太平洋戦争期における学術団体と戦争との関係を明らかにし、学術団体の戦時と戦後の連続性を展望することである。

戦時から戦後にかけて多くの学術団体が存続したが、本稿は、1942（昭和17）年６月に設立された大東亜学術協会（以下、協会とする）という組織とその活動に注目する。その理由は、①設立の経緯・活動内容が戦争の展開など時局やそれへの学界・大学の対応と密接に関わっており、②会誌が継続的に残存しているため、活動内容の検討が比較的容易なためである。

管見の限り、協会そのものを考察の対象とした研究は見当らない。ただし、菊地暁は、東方文化研究所員であった水野清一の「新しい歴史学」としての民俗学が展開された場である協会に言及した[(1)]。特に、協会に関する基礎的な事実を明らかにするとともに、「戦中・戦後の京都における人文学事情を伝えるきわめて貴重な素材」[(2)]と協会を評価した点は注目すべきである。また、樽見博は、協会の会誌『学海』に掲載された論説の内容を分析し、「戦時体制の中での知識人たちの苦渋」が

表①：大東亜学術協会・東方学術協会に関する会誌の刊行状況の変遷

会誌名	企画／編集／発行	期間
ひのもと	編集：和楽路屋書店 発行：ひのもと社	1942（昭和17）年12月（５巻11号）
ひのもと	企画：大東亜学術協会 編集：和楽路屋書店 発行：ひのもと社	43年１月（６巻１号）～43年５月（６巻５号）
ひのもと	編集：大東亜学術協会 発行：大和書院	43年６月（新１巻１号）
学藝	編集：大東亜学術協会 発行：大和書院	43年７月（１巻２号）～44年５月号（２巻５号）
学海	編集：大東亜学術協会 発行：秋田屋	44年６月（１巻1号）～45年６月号（２巻６号）
学海	編集：東方学術協会 発行：秋田屋	45年７・８月号（２巻７号）～47年５月号（４巻５号）
学藝	編集：東方学術協会 発行：秋田屋	47年７月（４巻６号）～48年９・10月号（５巻６号）

注：前掲註１菊地暁論文27頁、『ひのもと』、『学藝』、『学海』を参考に作成。43年１月号から原稿の送付先が東方文化研究所内の大東亜学術協会であることが明記される。

†京都大学大学文書館助教

見られると述べた[3]。このように、これまでは主に会誌で展開された言説や議論の内容が紹介されてきたため、協会の設立の経緯や組織としての特質については、菊地の研究以後、考察が十分に深められていない。そこで本稿では、①協会の設立経緯を再検討し、②会誌に掲載された文章の内容というよりも、協会の組織・活動内容や会誌そのものの特質をできるだけ明らかにすることを具体的な課題としたい。

本論に入る前に、協会の全体像を概観するため、組織と会誌の刊行状況を整理しておく。【表①】は、会誌の名称や企画・編集・発行の変遷を示したものである。一見して分かるように、協会が存続した約６年の間に、いずれも目まぐるしく変わっている。会誌は、42年12月に『ひのもと』として出発した[4]。43年月６号からは、発行所がひのもと社から大和書院へ移行しているが、「『ひのもと』という題号は急に改題できない事情」[5]のため、会誌の名称はそのままで、翌７月号から『学藝』に改称された。さらに、44年６月号から大和書院が秋田屋に統合されるにあたり、『学海』となった。戦後すぐに、協会は東方学術協会へと名称を変更したが、誌名は『学海』が維持された。ただその後、『学藝』へと戻された。編集については、当初、大阪の和楽路屋書店が行っていたが、43年１月号から協会が企画を、同年６月号からは編集を直接担当するようになった。協会が会誌の刊行にそれまで以上に積極的に関わるようになったといえよう。

それでは、なぜ協会は、このように学会名や会誌名を変えながらも存続したのだろうか。単に「大東亜」に関する学会であれば、敗戦とともにその役割を終えてもよいはずである。しかし、戦中から戦後にかけて、協会は存続し、会誌を定期的に刊行した。このように考えると、協会は、戦後にも継承されるべき存在意義を有していたのではないだろうか。本来ならば、戦後の協会についても検討する必要があるが、本稿は紙幅の都合もあり、戦時期における協会の組織や活動に分析対象を限定する。

第１章「大東亜新文化建設」と大東亜学術協会

１　設立の経緯

1940（昭和15）年６月、フランスがドイツに降伏した。これを受けて、外務省内では、ドイツとイタリアの勝利による戦争の終結と東南アジアの植民地の再分割が予測されるようになり、独伊両国を牽制する意図から大東亜共栄圏構想が生まれた[6]。それが、「大東亜共栄圏の確立を図る」ことを述べた松岡洋右外相の談話（同年８月１日）へとつながった[7]。同時期に、日本軍は北部仏印へ進駐しており、南方への軍事的な進出を展開していた。こうして、文化建設の枠組みも「日満支」の３地域から南方を含む大東亜共栄圏へと拡大していったという[8]。

占領地拡大の動きのなかで、南方への関心は俄然高まった。政府レベルでは、南方占領地に存在していた旧宗主国の科学研究機関の活用と日本人が風土の異なる南方に定住するうえでの障害・対策の研究とが大きな検討課題となり、学界でも「南方科学」ブームが到来した[9]。『ひのもと』では、真珠湾攻撃により「大東亜戦争」（以下、かっこをはずす）が開始されたとの認識が示され、その後の南方への進出拡大が同地方への理解を深めるべき契機となったと語られている[10]。京都帝大でも、理学部の南方科学研究会（42年２月）の設立に始まり、各部局で「南方」という言葉を冠した研究会の発足が相次いだ[11]。こうした動向は「先づ今学年における本学〔京都帝大ー以下、引用者注〕としての第一の顕著な足跡」[12]と評価された。総長であった羽田亨も、学内での南方に関する研究会新設のための経費を文部省に積極的に要求する

姿勢であった[13]。こうした研究会の乱立とも言える状況の一方で、研究会相互の「連絡」も問題となっていた[14]。

こうしたなか、42年６月７日、京都ホテルで協会の発会式、委員会総会が開催された[15]。会長に新村出（京都帝大名誉教授）、顧問に松本文三郎（東方文化研究所長）、羽田亨（京都帝大総長）、西田直二郎（京都帝大文学部教授）が選出された。一方で、これまでほとんど知られてこなかった点であるが、協会には発起人がおり、村田治郎（京都帝大工学部教授）がその代表であった[16]。

協会の目的は、第１に、「大東亜共栄圏の風土、民族、文化の各方面を学術的に調査研究し、大東亜新文化建設に寄与する」ことにあった。「風土、民族、文化」に関する調査研究が強調されているが、これは歴史や文化などの文科系だけではなく、建築や医学など理科系の研究分野も包含すると考えてよいだろう。目的にあわせて、会誌は「大東亜風土、民族、文化」という名称が予定されていたという。第２に、「学術界と一般人との間に新文化建設の強力な紐帯たらしめ同時に一般人の啓蒙運動に全員総力を挙げ」ること。新文化建設にあたって、協会が学界と一般社会との結節点となることが目標とされており、これは戦後にも継承されていく重要なスローガンである。第３に、「将来は全日本のみならず大陸及び南方の諸文化団体学界とも提携し真に大東亜学術団体の面目を発揮する」こと。会の名称に関して、「少々大げさなのは、当時のこととて致し方がない」[17]という後年の評価もあるが、日本を代表する学術団体として、大東亜共栄圏に含まれる中国大陸や南方の学術団体と提携するという強い意気込みがうかがえる[18]。

協会の事務局は東方文化研究所に置かれた[19]。事務局体制に関しては、「京大東方文化研究所の少壮学徒が中心となり」[20]との新聞報道や「水野〔清一〕さんらを中心とする東方文化研究所の人々と、京大東洋学関係の人々とがいっしょになって」[21]との指摘がある。さらに、所員の水野清一が事務局で実務を担っていたとの証言もあるように[22]、協会は東方文化研究所、特にその比較的若い所員が中心となって運営されたのである。

こうした設立の経緯は、会誌では十分に説明されていない。ただ、『ひのもと』1943年１月号には、「大東亜学術協会の創立」というコラムが掲載され、設立に関する情報が発信されている[23]。ここで簡単に紹介をしておこう。先に挙げた会長や顧問の他に理事がおり、委員には「京都帝大の東洋諸学の中堅学者に東方文化研究所の人々が加わってゐ」たという。会の目的に関しては、特に「学界をして一般社会人に結び付ける」、「学界人がこのやうな運動のために社会人とともに力を協せようとする」ことの重要性が強調されている。

さらに、同じ号の「編集後記」には、「大東亜諸地域の具体相を知ることは、敵を知ることでもある。敵の遺棄せる土地から健全なる大東亜文化を育てよ。先づ我々は之をモツーオとしたい」ともある。「「大東亜共栄圏」の建設とは、建て前の上でも、そのために開戦した戦争目的ではなく、開戦の後からとってつけられた戦争目的であった」[24]との指摘があるように、大東亜新文化建設も同様の事情を抱えていたのであろう。協会にとっての大東亜新文化はすでにあるもの、もしくは何らかの明確な目標があるものなのではなく、新しく創造するものであった[25]。

以上をまとめると、中国大陸や南方などをも含む「大東亜諸地域」に及ぶ新しい文化の建設、一般社会への啓豪を含む学界と一般社会との結合、「大東亜学術団体」への発展が３つの主要な目標として掲げられていたのである。

こうした京都帝大や協会の大東亜新文化建設をめぐる動きは国策と密接に関わっていた。そこで注目されるのが、大東亜学術教育連絡協議会と大東亜教育・学術・技術連絡協議会の設置である。42年７月６日、大東亜学術教育連絡会議の第１回

委員会が開催された。そもそも同協議会は、「大東亜建設に関し、南方占領地における学術教育上の具体的運用に関する連絡を図る」目的で設置された[26]。【表②】は発足当初のメンバーを示したものである。会長を文相が兼任していたように、中央省庁では文部省が中心となり、陸軍省、海軍省や企画院関係者が委員に就任している。学界では東京と京都の両帝国大学の総長、東京帝大の教授らが名を連ねている。

京都帝大からは、羽田亨総長がただ１人委員となった。京大に残されている史料によると[27]、協会が設立される直前の６月３日付で、文部省から京都帝国大学総長宛に羽田の委員就任を要請する文書が届いている。もちろん、羽田への就任要請は、それ以前から進められていたものと思われるが、結局、７月６日付で委員への嘱託が通知された。協会の顧問となる羽田が政府、特に文部省主導の大東亜新文化建設に関わる立場にあったことを確認しておきたい。

さらに、７月28日には大東亜学術教育連絡協議会が改組され、大東亜教育・学術・技術連絡協議会の設置が閣議決定された。この協議会の目的は、「大東亜建設ニ関シ南方占領地ニ於ケル教育・学術及科学技術関係ノ各般ニ亘リ之ガ企画、人選其ノ他具体的運用上必要ナル事項ニ付連絡協議ヲ行ヒ以テ総合的運営ニ依リ国家的最高能率ノ発揮ヲ図ル」[28]ことであった。さきの大東亜学術教育連絡協議会の目的に科学技術が加わり、総合的運営が目指されている。この協議会の活動の詳細は不明であるが、設置当初から果たすべき役割やその将来性について疑問が投げかけられていた[29]。このように協会は、大学や政府による大東亜新文化建設が推進されるなかで設立されたのである。

表②：大東亜学術教育連絡協議会役員

職名	氏名	所属など
会長	橋田邦彦	文相
副会長	菊池豊三郎	文部次官
委員	永井浩	文部省専門学務局長
	佐藤賢了	陸軍省軍務局長
	岡敬純	海軍省軍務局長
	秋永月三	企画院第一部長
	平賀譲	東京帝国大学総長・学術研究会議会長
	羽田亨	京都帝国大学総長
	宮川米次	東京帝国大学教授
	橋爪明男	同上
	佐々木喬	同上
幹事	清水虎雄	文部書記官
	伊藤日出登	同上
	迫水久常	企画院第一部第一課長
	加藤長	陸軍省軍務局軍務課
	松本秀志	海軍省軍務局軍務課

注：「大東亜教育・学術・技術連絡協議会設置ニ関スル件」（国立公文書館所蔵「公文類聚」第66編・昭和17年・第21巻・官職17・官制17（文部省５）、A14100990500）より作成。

２　役員構成

次に、協会の役員について見る。設立当初の役員構成を示したのが【表③】である（この表はおそらく一部の役員を示したものであろう）。会長の新村は著名な言語学者で、顧問の松本はインド哲学や仏教学、羽田は東洋史、西田は日本史の研

表③：創立時の大東亜学術協会の役員（1942年６月）

職名	氏名	所属など
会長	新村出	京都帝国大学名誉教授 東方文化研究所員
顧問	松本文三郎	京都帝国大学名誉教授 東方文化研究所長
	羽田亨	京都帝国大学総長 東方文化研究所員
	西田直二郎	京都帝国大学文学部教授 東方文化研究所員
理事	村田治郎	京都帝国大学工学部教授
	田邊隆二	関西配電
	田中二郎	第一銀行
	岩井武俊	大阪毎日新聞社
	新城英太郎	満鉄大阪支社

注：『ひのもと』1943年１月号、『朝日新聞』、『人文科学研究所50年』（京都大学人文科学研究所、1979年）より作成。

究者であった。同時に、会長と顧問のいずれもが東方文化研究所の関係者であったことも注目される。理事には、村田のほか、田邊隆二、田中二郎、岩井武俊、新城英太郎など学界以外の人物の名前が見られ、このことが協会の役員構成の特徴であったと言われている[30]。

ここで、理事の岩井について簡単に触れておきたい。岩井は、大阪毎日新聞社の社員であり、京都支局長などを務めた。一方で、内藤湖南に傾倒し、京都帝大文学部関係者を中心に結成された考古学談話会にも出入りしていた[31]。協会の委員であった外山軍治によれば、「学者グループと学界以外の人々とを結びつける仕事は、理事の一人である岩井武俊氏が担当した。岩井氏は〔中略〕考古学、国史学に造詣が深く、学界はもちろんひろく財界や芸術家たちともつながりがあり、京大にとっても〔東方文化〕研究所にとっても、頼りになる存在であった」[32]という。大阪毎日新聞が協会主催の大東亜講座を後援したことなどを考えると、岩井のような外部理事の存在は、協会の活動にとって不可欠であったといえる。

役員の全容が把握できる43年７月時点の役員を示したのが【表④】である。設立から約１年が経過している。設立当初と比較すると、顧問に狩野直喜（京都帝大名誉教授）が加わっている。【表③】と異なり、監事や委員の名前も確認でき、監事には実業家の山田啓之助と東方文化研究所員の能田忠亮が就いている。委員は、京都帝大の教員と東方文化研究所員が圧倒的多数を占める。役員構成から見ても、東方文化研究所が協会運営の中心的な存在であったことが分かる。ただ、京都帝大の教員に関しては、文学部関係者が多い一方、高木公三郎、木村康一、鈴木義孝のように理系学部からの就任も見られる。「大東亜共栄圏の風土、民族、文化」の研究や啓蒙に際して、文系学部に加えて、理系学部に所属する教員の役割も注意すべき点である。ちなみに、同じ文系学部でも法学部や経済

表④：大東亜学術協会役員（1943年７月時点）

職名	氏名	所属など
会長	新村出	京都帝国大学名誉教授・東方文化研究所員
顧問	松本文三郎	京都帝国大学名誉教授・東方文化研究所長
	狩野直喜	京都帝国大学名誉教授・東方文化研究所員
	羽田亨	京都帝国大学総長・東方文化研究所員
	西田直二郎	京都帝国大学文学部教授・東方文化研究所員
理事	岩井武俊	大阪毎日新聞社
	新城英太郎	満鉄大阪支社
	田中二郎	第一銀行
	田邊隆二	関西配電
	村田治郎	京都帝国大学工学部教授
監事	山田啓之助	製氷業（京都）
	能田忠亮	東方文化研究所員
委員	宮崎市定	京都帝国大学文学部助教授
	田村実造	京都帝国大学文学部助教授
	塚本善隆	東方文化研究所員
	内藤乾吉	元東方文化研究所員
	今西錦司	京都帝国大学理学部講師
	森鹿三	東方文化研究所員
	上野照夫	京都帝国大学文学部美術史研究室嘱託
	小川（貝塚）茂樹	東方文化研究所員
	木村康一	京都帝国大学医学部助教授・東方文化研究所員
	鈴木義孝	京都帝国大学工学部講師
	外山軍治	京都帝国大学文学部講師
	水野清一	東方文化研究所員
	藪内清	東方文化研究所員
	藤枝晃	東方文化研究所員
	高木公三郎	京都帝国大学理学部講師
	柴田実	京都帝国大学文学部講師
	長廣敏雄	東方文化研究所員
	長尾雅人	東方文化研究所員
	内藤戊申	京都帝国大学大学院（文学）・元東方文化研究所員
	日比野丈夫	東方文化研究所員

注：『学藝』1943年７月号、『京都帝国大学一覧』昭和17年度、『人文科学研究所50年』（京都大学人文科学研究所、1979年）、『明治大正昭和 京都人名録』（日本図書センター、1989年）より作成。

学部の教員は名前はない。

また、『学藝』1943年８月号を見ると、理事に大倉治一と大橋理祐の名前が確認できる。大倉は大倉酒造の経営者であり、大橋は貴族院の多額納税者議員であった。外部理事の増員で、協会の組織的強化を図ったものといえよう。また、同年11月号には、委員に吉川幸次郎、平岡武夫、大島利一の名前が追加されている。彼らはいずれも東方文化研究所の所員であり、同研究所からの委員の数がさらに増えたことになる。ただし、このことは協会の組織としての大きな変化とまではいえないだろう。

３　会誌の名称

「はじめに」で簡単に会誌の名称の変遷を紹介したが、ここではその経緯を検討する。菊地暁は、会誌の発行について、「優れた学術誌を関西で発行するという企画が最初にあり、それに協力したのが東方文化研究所周辺の学徒たちだった」(33)と指摘し、さらに、機関誌の名前が『ひのもと』、『学藝』、『学海』と推移したことについても、出版統制の影響に言及した。

後年、理事であった村田は会誌の歴史について、次のように述べている(34)。

> 昭和十七年のことだが、大阪の地図出版業者として有名だった和楽路屋・日下伊兵衛さんが、大阪の出版書店は金もうけ本意で、少しも良い本を出さないことをなげき、利益を度外視した真の出版奉国に徹した本屋が、大阪にもあることを身を以て示さうといふ意気ごみから、和楽路屋書店をはじめられた機会に、一つ新しい雑誌も出さうといふことになったが、当時は雑誌の新刊が許されなかったため、東京から出てゐた「ひのもと」を譲りうけることにして、その第一号を出したのが昭和十七年十二月だった。しかし警視庁から大阪府庁の方へ所管をうつすことや、題名を変へることがなかなか面倒なので、相かはらず東京の「ひのもと社」から出してゐる「ひのもと」という雑誌の形をとり辛うじて申込所・和楽路屋書店と附記してゐた有様だったが、そのうち本やの統合がそのすじから強制され、和楽路屋その他が集まって大和書院と改ったとき「ひのもと社」も一緒になったといふ形にして、はじめて大阪府庁の管轄に移され、題名を「学藝」として出発したのが、昭和十八年七月号からであった。ところが一年もたたない中に、再び出版屋の合併が極度に強要されて、大和書院その他が合同して秋田屋となったとき、大阪にあった一小雑誌をも吸収することにしたのはよかったが、題名を同時に変へることを、そのすじから強く要求せられて、やむを得ずつけたのが「学海」といふ名であった。「学海」の第一号が出たのは昭和十九年六月であり私はこの題名が嫌で編輯に関係する気持ちになれなかったが、その頃は綜合雑誌がだんだん影をひそめて来たのに、「学海」だけは出版しつづけたので、幸ひに多くの愛読者を獲得できた。終戦後にも編輯を最初の線の方向にもどしただけで、題名の方はそのまま今日までとにかく続けてきた

この内容を整理すると、①大阪の書店であった和楽路屋の意気込みが雑誌発行の契機となったこと、②出版事情のため、新しい雑誌の創刊が許されなかったため、東京の『ひのもと』を譲り受けたこと、③和楽路屋が出版社統合のため大和書院となった際、雑誌名が『ひのもと』から『学藝』に改められたこと、④再度出版社の統合が行われ、大和書院が秋田屋に統合された際、「そのすじ」から誌名の変更を求められ、『学海』と変えたことなどである。以上の村田の回顧は、先の菊地の指摘と多くの点が一致する。ただ付け加えておきたいのは、協会が設立される背景には、大東亜新文化建設の加速やそれにともなう京都帝大内での

南方や大東亜への関心の高まりがあり、協会の設立当初、「大東亜風土、民族、文化」という会誌名が想定されていたことである。このことを踏まえると、協会は大東亜新文化建設が声高に叫ばれるなかで設立され、当初から会誌の発行を予定していたが、厳しい出版事情のため、会誌の発行が遅れたということになろう。また、誌名は協会の設立時点で未定であり、仮に「大東亜風土、民族、文化」とされた可能性も否定できない。さらに、具体的な編集元や発行所も決まっていなかったのかもしれない。

『ひのもと』から『学藝』への誌名変更、そして、『学藝』の今後の方針に関して、協会は以下のように説明をしている[35]。

> ◇大東亜とはあたらしい言葉であって、従来呼ばれていた東亜とか東洋とかと同一ではないところに重要な意義がある。◇大東亜といふ言葉は大東亜戦争とははなれがたい。大東亜戦争の勝利を念ずる決意性が大東亜といふ言葉には充実してゐる。現今のごとき苛烈なる戦争の段階に於て、なほも出版とか学問とかに従事することが許されるとすれば、学界人及び出版人は大東亜の建設戦に積極的に参加し寄与する仕事を差しおいて、為すべきことはないだらう。◇しかも、大東亜の地域はまことに宏大であり、民族は多種多様であり、その土その人より育成された文化は高低さまざまである。吾々は一日も早くこれらの風土、民族、文化の実体を把握せねばならぬ。これは焦眉の急を要するのである。◇「学藝」という題号には、吾吾〔ママ〕が少年のころから親しむだ香りがあり、読者にも親しんでいたゞけることゝ思ふ。

『学藝』の編集方針も、協会が設立当初に提示した目標と基本的に違いはない。ただ、この文章で重要なのは、以下の３点である。第１に、大東亜という言葉の特質を説明している。大東亜が東亜や東洋と異なる新しい言葉であり、それは大東亜戦争との密接に関係しているという。第２に、大東亜と呼ばれる地域の風土、民族、文化の実態把握の緊急性を主張している。そして第３に、会誌名についてである。『学藝』には、「吾吾が少年のころから親しむが香り」があるとし、『ひのもと』とは異なり、協会が自主的に付与した名称であったのだろう。協会の目的である一般社会の啓蒙活動にふさわしい名称として考え出されたのではないだろうか。戦後、『学海』から『学藝』に再び改称された際、村田は『学藝』という名前を気に入っていたと述べている[36]。

さらに、『学藝』から『学海』への名称変更に関しては、これも村田が言うように、結果的には、出版事情による発行所の統合ということになるだろう[37]。『学海』の誌面では、社告で「雑誌学藝は学海と改題し、新学術綜合雑誌として新しく出発することゝなり」[38]と簡単に説明されている程度である。

４　価格・頁数

発行当初、会誌は定価20銭であった。43年８月号から特別行為税相当額[39]の１銭が付加され、21銭となった[40]。43年７月号で「頁数が現在のやうな四十二頁の狭さでは大東亜の記事を読者につたへるには、手も足も出ない。編集部が以上のやうな抱負をもってゐるのに、読者が実際に手をとられたものは、すこぶる貧弱だ」[41]との不満があったように、実質的な創刊号である42年12月号を除き、頁数はおおよそ40頁から42頁であった。この理由は、おそらく編集側にではなく、出版事情に原因があったと推測される[42]。43年12月号からは、「編輯部のはちきれさうなエネルギーを制しえないことの表明」[43]のため、定価は据え置きで、48頁への増頁が行われた。44年４月号は、「特別行為税相当額」が２銭となるのにともない、22銭となった。同年６月号からは、頁数がさらに65

頁に増頁され、戦後まで60頁以上を維持し続けた。同号は42銭、11月号は70銭に値上げされ、敗戦を迎える。創刊号と比較すると、実に3.5倍の値上げである。戦時下、値上げが実施される一方で、２度にわたる増頁が実現されていることは注目に値する。

会誌は、基本的に毎月10日付で発行されていた。しかし、43年９月号の頃になると、少なくとも１ヶ月程度の遅れが見られ、敗戦時にはおおよそ２ヶ月遅れで刊行されていたようである[44]。また、紙面は論文、随筆、外国語文献の翻訳、書評（「新刊是々非々」1943年３月号から）、短歌、歌謡の紹介、対談や座談会の記録などで構成されていた。比較的多様な紙面構成であったといえよう。

第２章　諸活動

第２章では、協会の具体的な活動内容について見ていきたい。①会誌への寄稿者の傾向、②講座・夏季講座、③協会が企画・発行した大東亜学術叢誌、④その他の活動を取り上げる。

１　会誌への寄稿者

【表⑤】は、『ひのもと』1942年12月号から『学海』1945年７・８月号までに掲載された文章の執筆者をまとめた表である。実に多くの人が寄稿しており、京都帝大の教員、東方文化研究所の所員が多くを占めていることがはっきりと分かる。その他、東京帝大、京都を中心とした関西の私立大学を始め、文化人なども執筆している。会長の新村や松本は数回執筆しているが、顧問の羽田、西田、狩野の寄稿は見られない。全体的に見ると、東方文化研究所員であった水野清一、今井湊（洧）の回数が多い。

執筆者全体の傾向では、転換点を見出すことができる。『ひのもと』時代は、先に挙げた水野や今井に加え、鈴木義孝、長尾雅人、長廣敏雄による寄稿が多い。鈴木は工学部教授であったが、長尾、長廣はいずれも東方文化研究所員であった。当初の会誌は刊行体制だけではなく、紙面においても、東方文化研究所に支えられていた。また、学者以外に文化人が含まれていた背景には、前述のように、理事であった岩井の幅広い人脈があったのかもしれない。

また、京都帝大文学部で結成されていた考古学談話会や民俗学談話会のメンバーが多く参加していることも目を引く[45]。菊地が注目したように[46]、協会は、研究成果を発表する場を新しい学問分野に提供したということであろうか。

しかし、『ひのもと』が『学藝』と改称される頃から、多様な分野を専門とする執筆者が増加する。青木正兒、梅原末治、頴原退蔵、大山定一、島芳夫、高安国世、土井虎賀寿、原随園、湯川秀樹、吉井勇などの名前が目立ち始める[47]。彼らを分類すると、①文学部に所属する考古学、日本文学、歴史学の研究者（青木、梅原、頴原、原）、②第三高等学校の教員（高安、土井）、③その他（湯川、吉井）である。会誌への寄稿者が京都帝大文学部の教員へも次第に拡大し、「学界が大同団結して、それぞれの方面の権威者に執筆を依頼できるやうな体制にならねばならない」[48]いう目標へと近づいたということだろう。裏を返せば、これまでの『ひのもと』ではそのような態勢が整っていなかったということである。つまり、『学藝』はそれまでのような東方文化研究所員が主に寄稿するような会誌から、広く京都帝大の教員が関与するような会誌へと変化していったと考えられる。こうしたことを示すかのように、『学藝』44年９月号では、「本誌も学術綜合編集誌としての面目を次第に発揮し、今後は科学陣営よりも本誌に相応しき寄稿を毎号得ることになっている」[49]と総合学術誌化への意気込みが述べられている。11号の巻頭には湯川秀樹「戦争と自然」が掲載された。

ただ、以上のような寄稿者の傾向については、村田が言及していたように[50]、戦時下における厳

しい出版事情のなかで、会誌の刊行を継続することができた体制、研究成果や意見を公表できる媒体としての魅力という側面も考慮に入れる必要があろう。

２　講座・夏季講座

第１回の「大東亜講座」は、43年８月１日から３日まで京都帝大楽友会館において、協会主催、毎日新聞社後援で開催された[51]。会費は３日間で１円であったが、協会員は無料であった。協会の発足当初から毎日新聞社の岩井が理事に名を連ねていたことからも、同社が協会のこうした活動を支援することが約束されていたのであろう。

講師とテーマは、宮崎市定（京都帝大助教授）「西南アジア旅行談」、赤松智城（前京城帝大教授文学博士）「回教ノ由来ト特色」、塚本善隆（東方文化研究所員）「仏教ノ日本的性格ト支那的性格」、村田治郎（京都帝大教授工学博士）「支那ノ回教建築」、佐保田鶴治（立命館大学講師）「印度ニ於ケル『カスト』ノ問題」、松本文三郎（東方文化研究所長文学博士）「古代印度ノ文化」であった。それぞれの内容や参加者の反応などは不明であるが、「大東亜」と冠するだけあって、日本や中国だけではなく、西南アジア、イスラム教、インドなど多岐にわたるテーマ設定となっている。また、テーマを見ると、会誌のような専門的な内容が前面に出ておらず、どちらかといえば、一般の聴衆にも馴染みの深いものであったと考えられる。１日目は、新村会長の挨拶に続き、宮崎と赤松の講演が行われ、100名以上の聴講者がいたという[52]。

さらに、第２回は43年11月２日と４日に大阪北浜の大同ビルで開催された。佐保田「印度の社会について」、能田忠亮（東方文化研究所員）「新しい暦の話」、塚本善隆「支那における弘法大師と慈覚大師」、那波利貞（京都帝大教授）「支那の庶民文化」などの講演が行われた[53]。ここで注意すべきは、第２回の講座が大阪で開かれたことである。この事情を探るうえで、次のような回顧が参考になる[54]。

> 私〔外山軍治〕も委員の一人であったが、水野〔清一〕さんと私とでやったことは、昭和二十年春、この協会〔大東亜学術協会〕を大阪の財界人に結びつけたことである。その経緯は省略するが、その仕事は、旭化成株式会社（当時日窒化学工業）社長の堀朋近氏を理事に加えることから始まった。この堀氏が世話役になり、大阪に本社をもつ主要会社の社長、役付重役の中で、学術文化に関心の深い人々三十余名に新たに会員になってもらった。サービスして京都での活動のほかに、毎月一回大阪で例会をひらき、京都から誰かが講演にいった。私がその幹事役をひきうけたが、水野さんも熱心で例会ごとに顔を出した。

協会に対する大阪の財界人の協力がいかに重要であったかが伝わってくる。史料にあるように、45年には、それまで以上に彼らの協力が必要になっていた。第２回の講座がわざわざ大阪で開かれたことも、協会に対する協力者の拡大といった同様に文脈のなかに位置付けられよう。また、講座だけでなく、例会も毎月１回大阪で開かれていたようである。

44年７月26日から28日にかけて第２回の夏季講座が、第１回と同じく京都帝大楽友会館で開催された。講師とテーマは以下の通りであった[55]。新村出「大東亜理想の特質」、柴田実「大東亜に於ける日本文化」、赤松智城「太平洋諸民族と宗教」、小川茂樹「大東亜共栄圏と支那世界」、田村実造「華僑と大東亜共栄圏」、上野照夫「印度文化の特質」。第１回の講座と比較すると、「大東亜」という用語を盛り込んだテーマが増えている。ただし、その理由などテーマ設定の経緯についてはよく分からない。

注意しなければならないのが、夏に開催された大東亜講座は、「夏季講座」という位置づけも与

表⑤：会誌への執筆状況

	ひのもと							学藝										
	1942年	1943年												1944年				
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
青木正兒																		
赤松智城																		
足利惇氏												●						
天沼俊一																	△	
綾村勝次									●									
井島勉																		
泉井久之助																		
井上智勇																		
今井洧（溱）			●	●		●	●			●			●					
今西錦司						●												
今西春秋							●											
今堀誠二																		
入矢生								●										
入矢義高			●															
上野照夫									●									
梅原末治																		
穎原退蔵																		
遠藤嘉基																		
大島康正																		
大島利一				●						●								
大築邦雄			●															
大西芳雄																		
大山定一																		
岡島誠太郎									●									
岡田真				●														
小川茂樹			●											●	△			
小野勝年		●																
鏡島寛之								●										
春日礼智						●												
加藤一雄											●							
金関丈夫							●											
鹿野忠雄																		
神尾明正							●											
川崎一雄																		●
木村康一			●															
木村素衛								●										
木村秀雄																	●	
清野謙次														●				
倉石武四郎						●												
黒田徳米									●		●							
黒田正利												●						
桑原武夫															△	●		
高坂正顕																		
駒井和愛					●													
小林太市郎																		●
小堀憲																		
小牧実繁																		
近藤豊							●											

学海 1945年														経歴等
6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7・8月	
	●		●		●		●			●	●	●		京都帝大文学部教授（支那語学支那文学）
									●					元京城帝大、京都帝大文学部講師（神道史）
														京都帝大文学部助教授（梵語学梵文学）
										●				※元京都帝大工学部教授
														書道研究家
												●		京都帝大文学部講師（美学）
									●				●	京都帝大文学部助教授（言語学）
								●						京都帝大文学部講師（西洋史）
		●												上海自然科学研究所員、前上海自然科学研究所員
														京都帝大理学部講師（動物学）
														北京大学文学院教授
													●	※広島文理科大学講師
														—
														東方文化研究所員
														京都帝大文学部美術史研究室嘱託
			●			●			●					京都帝大文学部教授（考古学）
	●	●					△	●△	△	△	△			京都帝大文学部講師（国語学国文学）
			●				△	△	△	△	△			京都帝大文学部助教授（国語学国文学）
						●				●				京都帝大文学部哲学研究室
														東方文化研究所員
														京都帝大大学院（文学／日本音楽史）
												●		京都帝大法学部教授
△	△		●			●	△	△	△	●△	△			京都帝大文学部講師（ドイツ語独逸文学）、ドイツ文化研究所員、ドイツ文化研究所副主事
														奈良女子高等師範学校教授
														歌人
					●		△	△	△					東方文化研究所所員
														華北交通会社資業局嘱託
														回教圏研究所員
														東方文化研究所員
														京都絵画専門学校助教授
														台北帝大教授（医博）
					●									海軍嘱託（理博）
														華北綜合調査研究所員
														※京阪電鉄
														京都帝大医学部薬学科助教授
														京都帝大文学部教授（教育学教育法）
														龍谷大学教授
														元京都帝大医学部教授
														京都帝大文学部教授（支那語学）
														京都帝大理学部動物学講師
●														京都帝大文学部講師（イタリア語イタリア文学）
														東北帝大助教授
						●								京都帝大人文科学研究所教授
														東京帝大文学部考古学講師兼東方文化学院
														※東方文化研究院、大阪市立美術館
						●								第三高等学校教授
							●							京都帝大文学部教授（史学地理学）
														京都帝大工学部建築学教室

	ひのもと							学藝										
	1942年	1943年												1944年				
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
佐伯千仞																		
佐保田鶴治									●								●	
佐和隆研											●							
塩田義秋	●																	
下程勇吉																		
柴田実																●		
島関勇														●				
島芳夫																		
清水光																		
章雅仁		●																
正田雨青																		
白井竹次郎																		●
新村出						●								●				●
杉本行夫																		
鈴江幸太郎				●														
鈴木義孝			●							●	●							
須田国太郎				●														
須東一二																		●
須藤賢					●									●		●		
高木公三郎					●													
高田保馬																		
高安国世																		
龍山章真					●												●	
田中重久																		●
田中直吉																●		
谷友幸																		
田村実造																		
田村松平																		
塚本善隆			●															
土井虎賀寿																		
徳永清行															△			
外村完二															●			
外山軍治																		
内藤晃										●								
内藤湖南																		
内藤戊申															●			
中井正一																		
長尾雅人	●									●			●					
長廣敏雄	●	●										●	●	●				
中村幸彦																		
新美寛													●					
西谷啓治																		
西田正秋								●										
能田忠亮							●									●		
野間三郎																		
長谷川素逝																●		
林昂																		●
原随園																		
坂野清夫							●						●					

学海 1945年														経歴等
6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7・8月	
											●			京都帝大法学部教授（刑法刑事訴訟法）
														立命館大学講師、京都帝大講師
		●												高野山大学教授
														※東方文化研究所員（43年5月まで）
		●			●			●			●			京都府立医大予科教授
														京都帝大文学部講師（国史）
														歌人
	●	●										●		京都帝大文学部助教授（倫理学）、京都帝大教授
						●								京都絵画専門学校教授
														—
				●										俳人
														ドイツ文化研究所員
			●							●				京都帝大名誉教授（文博）
				●										関西学院予科教授
														歌人
														京都帝大工学部建築学教室講師
		●												画家、文展審査員・独立美術協会会員
														—
				●										華北交通会社資業部員
														京都帝大理学部宇宙物理学教室講師
								●						元京都帝大経済学部教授
	●									●			●	第三高等学校教授
														大谷大学教授
														京都市文教局文化課
														立命館大学教授
			●								●		●	ドイツ文化研究所員
				●										京都帝大文学部助教授（東洋史）
								●						京都帝大理学部
														東方文化研究所員
●	●	●			●		△	△	△	△	△		●	第三高等学校教授
														京都帝大経済学部助教授（支那銀行論ほか）
●	●													大谷大学教授
						●								京都帝大文学部講師（東洋史）
														京都帝大国史研究室勤務
△	△													※京都帝大名誉教授（文博）
														京都帝大大学院（文学／唐宋史学史の研究）
									●					元京都帝大文学部講師
														東方文化研究所員
														東方文化研究所員
					●									天理図書館司書
														東方文化研究所員
			●	●			△	△	△	△	△			京都帝大文学部教授（宗教学）
														東京美校助教授
●														東方文化研究所員（理博）
				●										京都帝大文学部講師（地理学）
														俳人
														※大阪外国語学校助教授
			●				●			●		●		京都帝大文学部教授（史学地理学）
														※保険会社勤務

	ひのもと							学藝										
	1942年	1943年												1944年				
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
肥後和男																●		
日比野丈夫		●																
平岡武夫										●								
平山清次														●		●		
藤井乙男 (乙翁・紫影)																		
藤枝晃							●											
藤谷俊雄					●													
藤田元春																		
藤原義一					●													
舟岡省五																		
穂積文雄															△			
本田義英																	●	
正木瓜村																		
増田忠雄																		
松尾義海																	●	
松村克己																		
松本文三郎																	△	
松山基範																		
三上次男						●												
三国谷宏										●								
水野清一			●		●	●	●	●			●		●		●			●
水野鵠之助																		
宮崎市定				●		●									△			
宮本正清																	●	
六窪敏																●		
村上嘉実																●		
村田数之亮																●		
村田治郎		●							●●	●								
村山修一																		
森鹿三															△			
矢野仁一																		
藪内清	●	●											●					
山縣正明																		
山口益																	●	
山路閑古																		●
山中鷹夫						●												
山根徳太郎				●														
湯川秀樹																		
吉井勇																		
吉川幸次郎				●											△			
渡辺敏夫								●										

注：「●」は論文、随筆、和歌など、「△」は対談、口述、書問、座談などの記事を示している。翻訳文に関しては、原著者と訳者は掲載して
がある。「―」は不明を示す。また、京都帝大文学部の教員は、可能な限り、専門分野も記した。出典：『第三高等学校一覧』昭和15年度、
のもと』、『学藝』、『学海』の各巻、柴田陽一「満鉄調査部における地理学者の思想的展開」（『空間・社会・地理思想』16、2013年）を参

学海														経歴等
1945年														
6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7・8月	
														※東京文理科大学教授
														東方文化研究所員
		●												東方文化研究所員
														東京帝大理学部教授
							●	●			●			京都帝大名誉教授（文博）
														東方文化研究所員
														日本文化史
							●	●						※第三高等学校教授、京都絵画専門学校教授、彦根工業高等学校教授
														建築史家、京都市技師
												●	●	※京都帝大医学部教授もしくは名誉教授
														京都帝大経済学部助教授（東亜経済思想史）
														※京都帝大文学部教授
												●	●	—
									●					満鉄調査部（京都帝大文学部地理学教室卒業）
														関西学院教授
●				●									●	京都帝大文学部助教授（宗教学）
		●		●										京都帝大名誉教授（文博）
							●							※京都帝大名誉教授（理博）
														東京帝大文学部講師
														東亜研究所所員
	●	●	●	●		●					●			東方文化研究所員、京都帝大文学部講師
													●	—
	●			●										京都帝大文学部助教授（東洋史学）、京都帝大文学部教授
														京都日仏学館主事
														東方文化研究所員
														京都帝大大学院（文学／支那思想史）
														戦後、京都帝大文学部講師
●							●							京都帝大工学部建築学教室教授
●						●								京都市史編纂所員
														東方文化研究所員
	●				●									京都帝大名誉教授（文博）
														東方文化研究所員
													●	—
														大谷大学教授
														東京帝大理学部卒、後に共立女子大教授。古川柳の専門家
														—
														大阪商大教授
					●		●	●△			●			京都帝大理学部物理学教室教授
●			●				△						●	歌人
△		●			●		△	△	△	△	△			東方文化研究所員兼京都帝大文学部講師
														東方文化研究所員

いない。「経歴」欄については、基本的に掲載時点のものを示している。ただ、※がついている箇所はそのような場合となっていない可能性
『京都帝国大学一覧』昭和17年度、同自昭和18年度至昭和28年度、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター所蔵の『ひ
参考に作成した。

えられていたということである。つまり、第１回大東亜講座は第１回夏季講座であった。同年11月には第２回大東亜講座が、翌44年７月に第２回夏季講座が開かれたということである。

３　大東亜学術叢誌の刊行

協会の設立当初から、叢誌の刊行が計画されていた。ただ、実際に出版が実現したのは、大東亜学術協会編『蒙彊に於ける最近の考古学的発見』（1943年）と佐保田鶴治『印度の社会に就て』（1944年）の２冊である。これに先立ち、叢誌には含まれないが、協会の編集で『印度の文化』（1943年）が出版されている。

1943年３月号の『ひのもと』には、叢誌の目的について、「大東亜共栄圏の風土・民族・文化を調査研究し、その成果を一般に普及し、大東亜新文化の建設に寄与せんことを以つて念願としてゐる。本協会は昨年六月誕生以来、これがために諸種の事業を実施して今日に及んでゐる。今回またこれが目的に添はんとして、小冊子「大東亜学術叢誌」の刊行を計画し、その第一冊として「蒙彊に於ける最近の考古学的発見」を公にすることになった。本叢誌は今後その内容を文化科学と自然科学とに限らず、廣く大東亜共栄圏の学術に関するものを収め、活発に陸続刊行される予定である」[56]と説明されている。叢誌の目的は、協会の研究成果の普及であり、「文化科学」に限らず「自然科学」の成果の公表にもあるとされている。同号の裏表紙には、水野清一と日比野丈夫の共著『蒙彊に於ける最近の考古学的発見』とともに、叢誌２冊目の近刊予告として、青木一郎『梵鐘の物理学的研究』の広告が掲載されている。しかし、実際に本書が刊行されたのかについては不明である[57]。

それでは次に、叢誌それぞれの著作がどのような経緯で刊行されたのか、それらが協会の活動とどのように関わっていたのかを見ていく。第１に、『蒙彊に於ける最近の考古学的発見』である。本書の「例言」には、先の『ひのもと』に掲載された大東亜学術叢誌全体の目的に続いて、「本書は昨年十二月十九日、本協会の第二回談話会として京都藤井〔善助〕氏の有隣館で催された水野清一、日比野丈夫両氏の講演速記を収録したものである」と書かれている[58]。つまり、本書は協会の活動の一環として開催された談話会の講演内容を書籍化したものであった。小冊子で講演の速記録であるため、内容や文体は比較的読みやすいものとなっている。

第２に、『印度の社会に就て』である。本書の序では、「昭和十八年十月に昭南の地に於て孤々の声を揚げた自由印度仮政府は半歳にして已に故国印度の地に其の地盤を獲得せんとするに至ったのである。後の烏が先になるといふ俗諺の如く、重慶政権下の隣邦人よりも印度の方が一歩早く大東亜共栄の聖運に参加しさうである。我々日本人は大東亜同胞の長兄たらんとする抱負を抱く以上、弟達の事情を知悉してゐなければならない」と刊行の意図と経緯が述べられている[59]。この『印度の社会に就て』は、自由インド仮政府の成立という時局と非常に密接に関わって刊行されたというのである。さらに、「印度の社会に関して一番大切な、且つ六ヶしい問題はカストのそれであることは世人関知の事である。私は昭和十八年の夏と秋に大東亜学術協会の主催の下、京都と大阪の二ヶ所に於てカストを講じた」[60]とあるように、本書は、第１講「印度に於けるカストの問題」と第２講「現代に於けるカストの趨勢」で構成されていた。これを大東亜講座の講演テーマと照らし合わせると、少なくとも第１回の講座内容が第１講に反映されたと見ることができる。本書は、大東亜講座の内容を大東亜学術叢誌とした出版したということになる。

第３に、『印度の文化』である。本書は、協会の編集となっているが、大東亜学術叢誌に加えら

れていない。その経緯は、協会の成り立ちにも関わるので、ここで紹介しておきたい。

刊行の目的については、「言ふ迄もなく、大東亜文化の基底をなす主流は、一は支那文化であり、他は印度文化である。前者については従来とも幾多の研究業績が挙げられ、著書の類も少くない、然るに印度文化に関しては、概ね仏教を通じて印度を知るに止まってゐる。仏教の如きは既に印度に於て滅んでゐるものであり、如何程仏教の研究が行はれた所で、印度文化の把握といふ事は到底出来難い。それは丁度、支那が孔孟の教によって知られると為すが如き類である。我々は遙かに視野を広げ、印度の民族に即してあらゆる方角から此の地の文化を研究する必要がある」[61]とある。大東亜文化の基軸は、「支那文化」とともに「印度文化」にあるという前提のもと、「支那文化」に比べ「印度文化」に関する研究は立ち後れており、進展させなければならないという認識が示されている。また、「印度文化」とはいっても、仏教だけではなく、幅広く「印度の民族」に関する文化を取り上げるべきであると主張されている。

刊行の経緯や協会内でのインド研究に関する今後の活動予定については、以下のように述べられている[62]。

> 大東亜学術協会に於て、従来印度の文化を研究して来た方々の御集りを乞ひ、Garratt編の「印度の遺産」Legacy of India, 1937を中心として夫々専門の方面について、紹介批評を願ふことにしたのは、一昨年十二月以降のことである。〔中略〕回を重ねるにつれ、此の書に基づいて一書を公刊し、廣く印度文化一般の理解に資せんとする議が起った。そして最初のものとして、印度の社会、仏教、イスラーム、美術、自然科学の五項目について、夫々の専門家を煩はすことゝなった。「印度の遺産」購読の副産物とは言へ、内容的には原書を批判し、各自の見解を附加したものである。更にまた、此の書に依ることなく各自の研究に基づいて書下したものもある。従来の印度紹介とは根本的に異なったものであり充分自讃してよい内容を持つてゐるものと思ふ。〔中略〕此の書の執筆者の外に、印度研究の専門家を加へ、大東亜学術協会の中に印度研究会が設けられ今後更に、専門的な学術発表や普及書の刊行を企画してゐる。

協会に関係していた学者たちが『印度の遺産』という書の批評会を始めたことが出版の起源であった。また、印度研究会という組織については、「一昨年十二月」は41年12月となり、協会はまだ設立されていないのであるが、その頃からすでに東方文化研究所内などに存在していたのであろうか。一方、会誌には、少なくとも42年以来、協会内で「印度研究会部門」が活動してきたことが書かれている[63]。よって、協会の設立時、もしくは設立から比較的早い段階で、印度研究会が協会内に存在していたことが分かる。さらに、44年に入ると、「諸種の研究所と並んで、専門の『印度研究所』が一つ位つくられても決して時期尚早ではない」[64]との意気込みが表明される。さらに、研究会が中心となった学術発表や普及書の刊行も想定されていた。

4　その他の活動

『ひのもと』1943年６月号には、３ヶ月以内の会の活動が報告されている[65]。以下、この記事を参考に、これまでに取り上げた活動内容以外のものを簡単に紹介する。①月例談話会。第４回（同年２月13日）は、梅原末治（京都帝大文学部教授）が「仏印の考古学界と考古学的事業」、第５回（５月１日）は、木村康一（京都帝大医学部助教授）が「南方の有用植物」、第６回は、肥後和男（東京文理科大学教授）が「東亜世界の歴史構造」とした講演を行ったことが確認できる。例会に関しては、その案内や実施報告が断続的に会誌に掲載

されている。②映画鑑賞会。このイベントは協会の当初の活動予定には挙げられていなかった。５月８日に、中華電影公司上海撮影所関係者の「好意」で行われた。『長江の蚕糸』と『保甲』という映画を鑑賞したという。「今後機会あるごとに催されるであらう」とあるので、日常的な活動ではなかったのであろう。

おわりに

本稿の成果を２点まとめておきたい。

第１に、協会の設立経緯と組織的特質についてである。1941年12月以降、日米戦争が始まり、文教政策の理念とその対象が「東亜」から「大東亜」へと拡大した。こうした変化を受け、大学や学術団体は時局への協力に邁進していく。協会は、京都帝大内外における南方への関心や大東亜新文化建設の機運の高まりを背景に設立された。協会は大東亜という新たな概念を学問的に追究するとともに、大東亜に関する知識を普及し、「大東亜学術団体」化を図るという大別して３つの目的を掲げたのである。

また、役員構成にも見られるように、東方文化研究所が協会運営の中心を担ったことは間違いない。ただし、組織運営と会誌の編集において、村田ら理科系の教員や岩井ら外部理事の活動も重要な役割を果たしていたのである。

第２に、大東亜学術協会の活動の特質についてである。協会の主な活動は、会誌の発行、講座・例会の開催であった。会誌への寄稿に関しては、協会運営と同じく、東方文化研究所員の存在が目立つ。しかし、『ひのもと』から『学藝』へと改称される頃から、協会の目標であった分野横断的な学術団体化が進み、京都帝大を中心とする理科系の大学教員や文化人の寄稿が増加していった。また、講座や例会で比較的分かりやすい講演テーマを掲げ、一般社会とのつながりの強化を目指すとともに、啓蒙活動も積極的に行われていた。よって、協会は学界と一般社会との接近に一定の成果を挙げたことを主張するに至るのである[66]。会誌の執筆者が東方文化研究所員から京都帝大や関西の私大の教員、文化人へと拡大していくなかで、大東亜新文化の建設の学術的側面を担いつつ、一般社会への啓蒙を行うというのが協会活動の両輪であったといえよう。ただし、こうした協会の活動には、京都や大阪の財界人、大阪毎日新聞を始めとしたメディアの協力が不可欠であったことも付け加えておきたい。

最後に、見通しを２点述べておく。

第１に、協会の戦後への連続性についてである。戦後、協会は東方学術協会と名前を変える[67]。同時に会誌では、「本誌は御覧の通り純学術雑誌ではなく、専門の人にのみ読まれるような堅苦しいものではない。誌名の示す如く、学藝関係者の論説、研究を内容を下すことなく、平易に興味深く表現してゐる読物で埋められている」（須藤賢）と説明された[68]。つまり、東方学術協会は、協会の目的を引き継ぎ「東方」に関する学術成果の一般社会への啓蒙活動を行っていくことが宣言されているのである。大東亜新文化という追究すべきテーマの喪失を埋め合わせるかのようにクローズアップされることになった東方学術協会の重要な活動目標であったといえよう[69]。

第２に、京都帝大文学部内に設けられた史学研究会や同会が編集・発行する『史林』との関係についてである。『学藝』と『史林』の執筆者には同じ名前が多く見られる。『学藝』の最終号（1948年９・10月）には、「史林も漸く軌道に乗り、十月には改巻第一号が出る予定です。〔中略〕うんとスケールが大きくなって東洋史、西洋史、国史、考古学、地理学を包括したものです」[70]と、48年10月から新装で刊行される『史林』の宣伝ともいうべき記述がある。確かに、『史林』は、1947年12月号から48年10月号までの間、新号が発行されていない。また、「戦時中、経営面、その他

の困難な諸事情から、本研究会〔史学研究会〕の活動も、やや低調となった」[71]という。戦時・戦後も継続的に発行されていた『学藝』[72]と『史林』との関係も興味深いところではあるが、今後の課題とせざるを得ない。

[註]

（1）菊地暁「民俗学者・水野清一―あるいは、「新しい歴史学」としての民俗学と考古学」（坂野徹編著『帝国を調べる』勁草書房、2016年）。

（2）前掲菊地論文。

（3）樽見博「大東亜学術協会の雑誌「学海」―学徒動員と学問の間で苦悩する教師の内面―」（『日本古書通信』82-7、2017年）。さらに、樽見は「「学海」は文化総合誌といっても、他の商業的なものとは違う。同人誌的で全体として高尚な雑誌であり、〔中略〕戦時体制の中での知識人たちの苦渋も垣間見られる」と述べている。

（4）協会の『ひのもと』が５巻11号から刊行されている理由について、菊池暁は、「この時期、出版統制により新雑誌の創刊が許可されず、休刊中の「ひのもと社」から雑誌の権利を譲り受ける形になったため」と指摘している（前掲菊池論文）。

（5）『ひのもと』1943年６月号、41頁。

（6）河西晃祐『帝国日本の拡張と崩壊―「大東亜共栄圏」への歴史的展開―』（法政大学出版局、2012年）133頁。

（7）藤井祐介「統治の秘法―文化建設とは何か？―」（池田浩士編『大東亜共栄圏の文化建設』人文書院、2007年）。藤井は、大東亜新文化建設の矛盾として、①東亜文化建設との間に生じた矛盾、②大東亜共栄圏内部に生じた矛盾を指摘した。①については、「東亜文化建設は「日満支」三地域における民族の共存共栄を理想としたが、大東亜文化建設では皇民化に重点が置かれ、各民族の生活様式をも強制的に改変しようとした」こと、②については、大東亜新文化建設の理念がフランス領インドシナやタイなど大東亜共栄圏内部に浸透しなかったことを挙げた。

（8）同上。

（9）廣重徹『科学の社会史』（中央公論社、1973年）200頁。

(10)『ひのもと』1942年12月号、33頁。

(11) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史総説編』（財団法人京都大学後援会、1998年）424～425頁及び442～443頁。

(12)『京都帝国大学新聞』1942年９月20日付。

(13) 京都大学大学文書館所蔵「羽田亨日記」1942年２月27日条。

(14) 同上1942年３月11日条。

(15)『京都新聞』1942年６月９日付。また、翌43年６月７日に、総会が開催されていることも確認できる（前掲「羽田亨日記」1943年６月７日条）。ちなみに、『大阪毎日新聞』1942年６月７日付には、協会創立の案内が掲載されている。

(16) 現在、京都大学工学部・大学院工学研究科吉田建築系図書室に所蔵されている『ひのもと』、『学藝』、『学海』の一部の表紙に「村田様」との書き込みがある。これらの雑誌は村田治郎の蔵書であった可能性が高い。

(17) 外山軍治「水野さんと私」（貝塚茂樹・日比野丈夫編『水野清一博士追憶集』京都大学人文科学研究所内「水野清一博士追憶集」刊行会、1973年、112頁）。

(18) 廣重徹は、当時の南方科学について、敵国である欧米諸国への劣等感が存在していたと述べている（前掲廣重書203頁）。

(19)『学藝』1943年６月号、41頁。

(20)「大東亜学術協会発足」（『大阪毎日新聞』1942年６月８日付）。

(21) 前掲貝塚茂樹・日比野丈夫編著112頁。

(22)「先学を語る（第二回）―羽田亨博士―」（財団法人東方学会編『東方学回想Ⅳ　先学を語る（３）』刀水書房、2000年、145頁）。水野清一の思想や活動については、前掲菊地論文を参照されたい。

(23)『ひのもと』1943年１月号、35頁。

(24) 有馬学『帝国の昭和』（講談社、2002年）288頁。

(25) この点、近代日本における南方起源説の展開を

考察し、「一九三〇年代までは、南方起源説は学説・言説を問わず、文字どおり南方から日本への民族的・文化的要素の流入を前提とするものだったが、「大東亜共栄圏」の成立後には、日本から南方への文化要素の伝播という現象が「歴史的事実」として語られはじめていく」という河西の指摘は興味深い（前掲河西書245頁。特に第９章を参照されたい）。

(26)『朝日新聞』［東京版］1942年７月７日付。

(27) 京都大学大学文書館所蔵「文部省往復書類　昭和17年」（識別番号01A00403）。

(28)「大東亜教育・学術・技術連絡協議会設置ニ関スル件」（国立公文書館所蔵「公文類聚」第66編・昭和17年・第21巻・官職17・官制17（文部省５）、A14100990500）。

(29)『朝日新聞』［東京版］（1942年７月30日付）。

(30) 前掲貝塚茂樹・日比野丈夫編著112頁。

(31) 末永雅雄『日本考古学への道―学徒が越えた―』（雄山閣、1986年）763頁。

(32) 前掲貝塚茂樹・日比野丈夫編著112頁。

(33) 前掲菊地論文。

(34)『学藝』1947年７月号、49頁。

(35)『学藝』1943年７月号、41頁。

(36)『学藝』1947年７月号、49頁。

(37) 同上。

(38)『学海』1944年６月号、65頁。

(39) 特別行為税は、消費の抑制と購買力の吸収を目的に1943年に創設された。

(40) ちなみに、当初は郵税２銭であったが、送料１銭へと変更される。

(41)『学藝』1943年７月号、41頁。

(42)『学藝』1943年７月号、49頁。

(43)『学藝』1943年12月号、49頁。

(44)『学海』1945年６月号。

(45) 前掲末永書763～764頁。考古学談話会には、羽田亨、足立文太郎、新村猛、福山敏男、岡島誠太郎、三宅宗悦、島田貞彦、鈴木成高、肥後和男、喜田貞吉、浜田耕作、水野清一、末永雅雄、小川五郎、小牧実繁、森鹿三、長廣敏雄らが参加しており、民俗学談話会は肥後和男、山根徳太郎、水野清一、岡島誠太郎、末永雅雄によって結成されたという（同上）。

(46) 前掲菊地論文。

(47) 彼らの多くが松尾芭蕉の句をめぐる座談会に参加している。その内容は「芭蕉研究」として誌面に反映された。

(48)『学藝』1943年７月号、41頁。

(49)『学藝』1944年９月号、65頁。

(50)『学藝』1947年７月号、49頁。さらに、『学藝』1944年４月号に、「『学藝』が雑誌として担ふ責務にも重いものがある。存続の指令を受けて、右の感想は殊に強い」（同65頁）とあるが、詳細は不明である。

(51)『学藝』1943年８月号。

(52)『毎日新聞』［大阪版］1943年８月２日付。

(53)『毎日新聞』［大阪版］1943年10月31日付。

(54) 前掲貝塚茂樹・日比野丈夫編著113頁。ちなみに外山は、こうしたなかで構築された協会と大阪財界との関係が、後年に水野らが中心となって行われた雲岡刊行事業にも大きく役立ったとも指摘している。

(55)『学海』1944年８月号、63頁。

(56)『ひのもと』1943年３月号の裏表紙。

(57) 後に、青木は『鐘の話』［教養文庫151］（弘文堂書房、1948年）を刊行しているが、梵鐘に関する専門書の刊行は確認できない。

(58)『蒙彊に於ける最近の考古学的発見』（大和書院、1943年）１～２頁。

(59) 佐保田鶴治『印度の社会に就て』（秋田屋、1944年）１頁。

(60) 前掲佐保田書２頁。

(61) 大東亜学術協会編『印度の文化』（生活社、1943年）287頁。

(62) 前掲大東亜学術協会編書287～289頁。本書の原稿は42年９月に出版社に提出されたようだが、刊行は遅延していた。協会は６月に設立されたばかりであり、協会の編集であるが、大東亜学術叢誌に加えられることはなかった。協会の活動というよりも、すでに存在していた印度研究会の成果として捉えられたためであろう。

(63)『学藝』1943年９月号、41頁。『ひのもと』1943年６月号には、協会内に「印度研究懇話会」結成されたことが報告されている（同号41頁）。また、『学藝』1944年４月号では、「印度文化の研究」が特集された。

(64)『学藝』1944年４月号、65頁。

(65)『学藝』1943年６月号、40頁。第１回から第３回までの月例談話会に関する報告は誌面上で確認することができない。

(66) 大東亜学術協会「国民の品位」（『学藝』1944年２月号）。

(67) ちなみに、1947年６月24日に設立された東方学術協会（現在の東方学会の前身）とは別組織である。羽田亨は、この東方学術協会の会長兼京都支部長となる。東方学術協会の設立経緯について、羽田亨は、「この会〔東方学会〕のはじめの名前は東方学術協会。ところが、同じ名前の会が新村出先生を会長にして京都にあった。その実務をやっていたのは水野清一君です。先生は、そっちのほうの名前を変えさせればいい」（前掲財団法人東方学会編145頁）と述べていたという。

(68)『学海』1945年６月号、65頁。

(69) 東方学術協会の戦後の活動や戦前・戦後の会誌の内容については、今後の課題である。

(70)『学藝』1948年９・10月号、49頁。

(71)『史林』32、1948年10月。戦後すぐに『史林』の刊行状況が厳しい状況に陥ったことについては、『史林』100-6（2017年）に掲載されている礪波護「『史林』と京大東洋史学」、紀平英作「ニューヒストリー（New History）の百年」を参照されたい。

(72) 45・46年における『学藝』の刊行について、田坂憲二は、「雑誌を継続しようとする意志」の強さや「京都大学系統の知識人たちの熱い思い」を見出している（同「書物を紡ぐ人々―吉井勇『流離抄』を中心に―」『文学・語学』217、2016年）。

注：史料調査にあたっては、一般財団法人新村出記念財団重山文庫の新村恭氏にたいへんお世話になりました。記して感謝申し上げます。